



わが愛すべき 80年代映画論 (第二回)

文章：かつお



『フラッシュ・ゴードン Blu-ray (原題：Flash Gordon)』

Blu-ray 発売中 ¥4,800 + 税
 発売元・販売元 株式会社KADOKAWA
 監督：マイク・ホッジス
 主演：サム・J・ジョーンズ
 主題歌：クイーン「フラッシュのテーマ」

「スター・ウォーズを超えた！」

近所のビデオ屋で何気なく手にしたVHSの裏にあった文字。心躍った。レンタル屋からの家路で興奮して話したら、母が「自分で“超えた”とか言ってるの、基本、超えてないから。」という。その言葉の意味はよく分からなかったが、とんでもないSFスペクタクルを予感させるパッケージに惹かれた。冒頭からクイーンの「Flash Ah!!!… Savior of the Universe!」という歌がテンションを上げまくる。

ストーリーは、「Earthquake」「Volcano」といったボタン一つで地球を破壊しようとする悪の皇帝ミンを倒すべく、アメフトのスター選手であるフラッシュ・ゴードンと、ひょんなことから巻き込まれたお約束の美女（デイル）がミンの支配する惑星に乗り込む。ミンはデイルを気に入ってしまい、フラッシュを殺そうとするが、返り討ちにあってぶっ倒され、地球、ひいては宇宙を救う壮大なスペースオペラである。

まず主人公フラッシュ・ゴードンの強烈な個性が光る。なにせ着ているTシャツに大きな「FLASH」の文字。自身のファーストネームが入ったシャツを堂々と着こなすこのメンタルの強さは、『ど根性ガエル』（作：吉沢やすみ）のゴリライモの「ゴ」Tシャツにすら、どこか日本人的な奥ゆかしさを感じざるを得ないレベルであると言えよう。まさしく金髪アメフト選手という、いわばスクールカースト上位者にしか許されない荒行。

そしてミン皇帝の間のセットがすごい。「さっき大道具さんに作ってもらいました」的な、このコント番組感。並み居る皇帝親衛隊の、そこはかとないコスプレパーティー感に加え、スイカ状の

物体をアメラグボールに見立てたフラッシュのタックルになすすべもなく倒されまくる。ボタン一つで人様の惑星に地震や火山の噴火を起こす力を持ちながら、レーザーガンはおろか、磨製石器の一つも出してこない宇宙人たちの心優しさには思わず目頭が熱くなる。

しかし最後は捕えられ、別の惑星に追いやられたゴードン。ミンは着々とデイルとの結婚の準備を進める。それを阻止すべく、別の惑星からミンのいる惑星モンゴに向かうゴードン。「ちょっとモンゴの様子を聞いてみよう」とつけた宇宙船の通信機から流れる「結婚行進曲」（ワーグナー）。「oh, my god…」言葉を失うゴードン。いやいやいや。どうなのどうなの？そこで地球のお約束曲が流れるって、ここはワーグナーの宇宙的知名度に僕らが感激すべきところなのか、それとも、もはや物語も後半。気にした方が負けなのか。

しかし時代は80年代。『スター・ウォーズ』が異常なのであって、この映画の雑多な雰囲気こそ、もしかしたら80年代的であると言えるのかもしれない。

「“超えた”とか言ってるの基本超えてない。」

この母の言葉のおかげで、のちに「ブルース・リーを超えるカンフースター、ブルース・リー！」^{*1}や「スタローンもシュワルツェネッガーもこの男の登場を恐れていた、ドルフ・ラングレン！」といったキャッチコピーにも、そこそこ冷静にスルーできた自分がいたことは間違いのない。

さて、本作に話を戻せば、観終わった感想は、そう。「フラッシュ、ああ〜…」であったことは、もはや言うまでもない。

連載

わが愛すべき80年代映画論

*1) Bruce Li (本名：ホー・チョンドー)。代表作は『新・死亡遊戯/7人のカンフー』（1975年）、『ブルース・リーの刑事物語』（1978年）など。